

## その 50

### 3人の万葉学者のリレー「短歌通信」



上の写真は、4月20日から高岡万葉歴史館で始まった春の特別展『うるわしき万葉植物の世界』で展示された、いずれ万葉学者となる若き日の大浜巖比古氏の80年前の「堅香子の歌」絵葉書の展示コーナーである。

この展観が始まってしばらく後、同館の坂本信幸館長のFBに、秋田県仙北市のカタクリ群生地への旅の写真が投稿された（本稿末尾に掲載）。文字通りカタクリの群生と呼ぶにふさわしい景観である。「3年ぶりに仙北市のカタクリ群生の郷を見に行きました。お天気に恵まれ角館の満開の枝垂桜も美しく、大満足の旅でした」と書かれていた。仙北市の観光案内には、カタクリ群生の郷は次のように紹介されている。

＜カタクリは地元では「カタッコ」「カタンコ」と呼ばれるユリ科の多年草。特産の西明寺栗を栽培する栗林に自生しており、その規模は20ヘクタール（東京ドーム4.2個分）にも及びます＞

ところで、仙北市のカタクリ群生の郷のHPなどに掲載されている様々なカタクリの写真を見ていて1つ気がついたことがあった。その中に、初めて見たカタクリの花の写真があったことである。群生するカタクリの花の紫色の絨毯の中に、くっとても貴重な白のカタクリが咲いています。見かけたら、踏み付けなど気をつけて散策をお楽しみください」とキャプションが付けられていた。白いカタクリの花の写真である。

＜この白カタクリは、花が咲くまで10年近くもの年月を要する貴重な花＞と紹介されている。坂本館長一行は、今回幸運にも見事な白カタクリを見ることができたというが、他ではなかなか見られないという。私も、以前北海道のカタクリの里で一面紫のじゅうたんのようには咲き誇ったカタクリの花畑を訪れたことがあったが、白カタクリを見た記憶はない。

そんな白カタクリの写真の中に、ちょっと気になる1枚があった。「初めて」と書いたが、いや見覚えがある……そう、現在高岡万葉歴史館で展示されている、あの絵葉書の堅香子の花の写真である。よく見る花弁を後ろにピンと反らせたカタクリの花



と違って、絵葉書にするには、ちょっと元気がない花の写真で、「しな垂れた」と前回酷評した(?)カタクリの花である。モノクロの写真なので、それが白なのか、紫なのかはわからないが、少なくとも花と葉の形状はそっくりである。そこで、もしかしたら、この写真は、白カタクリの花なのではないかと思いつき、念のため万葉植物園に問い合わせしてみた。そもそも万葉植物園でカタクリを見ることができるか?カタクリはどのくらいの規模で栽培されているか?その中に白カタクリはあるか?そして、カタクリの花の絵葉書はあるか?など等についてである。



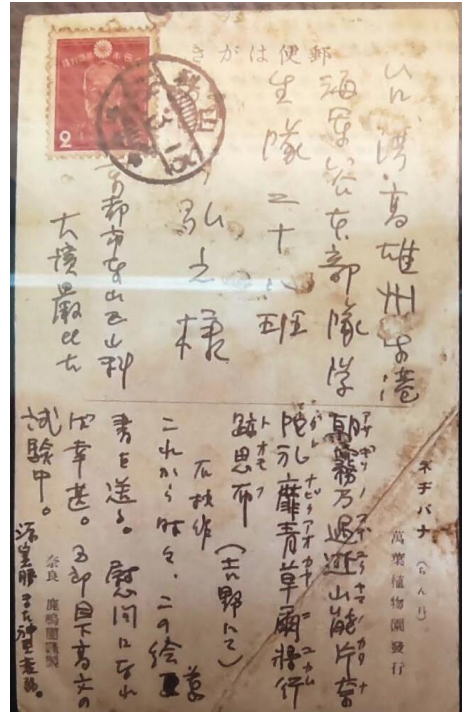
その答えはシンプルだった。「1メートル四方の標本として植えている外は、園内の何か所かに数本程度自生しています。毎年3月下旬から4月初め頃見ることができます」。そして、予想通り、「残念ながら白カタクリはありません。現在は絵葉書の発売もしていません」とのことだった。80年以上昔のこととはいえ、カタクリの状況はそう変わっていないだろうから、この絵葉書の写真が白カタクリである可能性はないことは分かった。カタクリの花の開花の時期は短く、絵葉書の消印は切手がはがれていて18日という日付だけが残っているが、何年の何月かは不明である。従って、大浜氏が同園を訪れた時期は分からない。いったい大浜氏は実物のカタクリの花を見たのだろうか、堅香子の花を見ることができたのだろうか。もし見ていれば、文面でカタクリの花そのものに一言でも触れていたはずだが、堅香子の歌だけでそれはない。絵葉書のカタクリの花を見て、家持の堅香子の歌を思い浮かべ、阿川氏に送ったのかな、など、想像を掻き立てる写真ではある。

さて、高岡万葉歴史館に展示したその堅香子の絵葉書を含んだ資料、作家阿川弘之氏が遺された一連の図書や資料についてである。海軍関係の資料は呉市の大和ミュージアムに、ヒロシマ関係の資料は広島市立中央図書館に、そして、万葉集関係の資料は高岡万葉歴史館に寄贈された。そこで、高岡万葉歴史館に寄贈された万葉集関係の資料である。その内訳について、坂本館長から連絡をもらった。

それによると、<生原稿、「大瀧巖比古の死」初稿、「大瀧巖比古の死」再稿(『青春と読書』所収)、  
「中島光風先生—私の中の日本人—」の3本。中島光風先生からの封書1通、ハガキ8葉。大瀧巖比古氏からのハガキ9葉(うち絵葉書2葉)。その他、大瀧巖比古氏の大学関係の書簡、奥さんからの手紙、息子の処女論文など6点>となっている。

「80年前の堅香子の絵葉書」は、この大瀧巖比古氏からのハガキ9葉(うち絵葉書2葉)の絵葉書のうちの1枚だったが、もう1枚の絵葉書も、とても興味深いので見てみよう。

冒頭の写真のように、高岡万葉歴史館で春の特別展『うるわしき万葉植物の世界』で、「堅香子の歌」の絵葉書と並べて展示されたのが、同じ絵葉書のシリーズ「ネジバナ」の絵葉書である(写真中央の左)。



この絵葉書、堅香子の絵葉書の前に出されたもののようで、宛先は、同じく台湾高雄の阿川氏宛である。こちらの絵葉書の切手は残っていて、その上に押された消印の日付は、昭和18年3月18日となっている。そう言えば、堅香子の絵葉書の日付も同じ18日で、消印の押し方も同じである。日付が同じなら、植物園を訪れた同日に2枚の絵葉書入手し、同日に投函した可能性が出てくる。としたら、3月下旬から咲き始めるカタクリの花を見ていたのかも、と思い直したりするのである。写真のクレジットは、堅香子と同じく「萬葉植物園発行 奈良 鹿鳴園謹製」とあり、花の名は、「ネジバナ」とあるので、万葉集のネジバナの歌だろう、と思い、写真の裏の文面の冒頭に書かれた歌を読んだ。

アサギリノスギユクヤマノカタナダレナピクアオカヤニユカムトオモフ  
 「朝霧乃過逝山能片奈陀礼靡青草爾將行跡思布」(吉野にて) ●●作

「青草」と書いて、アオカヤと万葉仮名が付せられているが、これがネジバナのことだろうか。モノクロの写真で分かりにくいこともあるが、確かに花というより茅かやのような草である。歌の作者の字が崩し字のため判読できないので、「●●作」としたが、万葉集事典を調べてもこの歌は万葉集にはない。事典によると、ネジバナは、万葉の時代は「ねつこ草」と呼ばれていて、万葉集には1首だけ、ねつこ草、つまり、ネジバナの歌が収められているという。次の歌である。

しばつき みうらさき ねつこくさ あれ  
 「芝付の 御宇良崎なる 根都古草 逢ひ見ずあらば 吾恋ひめやも」 作者未詳 (巻14・3508)

大浜氏の絵葉書に万葉仮名で書かれている万葉歌と思しき歌とは似て似つかない歌である。改めて「●●作」という崩した字を見た。つらつら眺めているうちに、最初の●は「右」と読むのでは……とすると、この歌は大浜氏が万葉歌の体裁をとりながら、自身が(吉野にて)作った歌なのではないかということに思い至った。そう言えば、阿川氏は「大浜はいつも万葉集を白文で読む」と言っていた。白文とは、万葉仮名で書かれた

原文のことで、大浜氏は読むだけではなく、自分の歌も万葉仮名で書いたのだろうか。万葉集研究の学究として極めて真面目、あるいは、才気溢れる若者の巧みな遊び心だったのだろうか。とすると、2つ目の●は「戯」の崩し字ではなかろうか。「戯作」……「戯れに」万葉歌を「作り」詠んだということか。

読み方に自信がないこともあり、坂本館長にどう読むのか確認を求めたところ、異なる答えが返ってきた。「拙」である。つまり、自分の作品をへりくだって呼ぶときの「拙作」では、という。なるほど、そう言われれば、確かにそうだ。「拙」の字の方が近い。どちらにしても、大浜氏自作の歌であることは確かだ。もしかしたら、この葉書を手にした若き阿川氏も、私と同じように頭をひねり、また、それを楽しんだのではないだろうか。この絵葉書や歌を解読することそのことが、外地で厳しい訓練に明け暮れる阿川氏の心を和らげ慰めたことだろう。その結果、阿川氏をして、「堅香子の歌が、万葉集 4516 首の内一番好きな歌」と言わしめたのだろう。他に、この歌が一番という人を、私は知らない。



「青草」の歌の後に、「これから時々この絵葉書を送る。慰問になれば幸甚」と添え書きされていた。

阿川氏の手元に残された大浜氏の便りは、この2つの絵葉書に始まり、2年遅れで同じ海軍に入隊し、横須賀の海兵団から霞が関の海軍省に戻った阿川氏宛のもの、そして、戦後から大浜氏が亡くなる3年前の昭和49年の年賀状まで12通が残されていた。その多くに、その時々詠んだ歌が書かれていたが、この中に短歌だけで綴った葉書が1通あった。前書きには、「短歌風の通信である」と書き、細かい字で、14首の歌がビッシリ書かれている。その後続けて、「こんなほんものの歌と思っではいけない」と、念を入れて但し書きを付けている。つまり、本物の短歌ではなく「短歌による通信」、短歌の形式をとった「短歌通信」であるというのである。言うまでもなく、80年前の阿川氏への「短歌通信」だが、それが、大浜氏の唯一の弟子である坂本館長の手に入り、80年後遺弟への「短歌通信」になったことは、歌神の遊び心のおかげなのかも知れない。

歌を書いたその下の空白には、後書きとして、「光風さんよりの葉書を写した」とある。つまり、光風先生から送られた葉書より、先生の歌を何首か写し、紹介している。光風先生とは言うまでもなく、阿川・大浜両氏の、旧制広島高校の恩師で万葉学者の中島光風氏である。この14首の歌の内、3首を紹介する。3首目は、光風先生の葉書からの写しである。

「巖比古の大竹卒業の祝いにと母堂は我に下駄を賜びたり」

「光風先生は処女出版の稿終えぬ店に出づるは半年後か」

「弘之が弘之さびし童顔の酔ひしれ顔はかはゆきこと等」

その光風先生から阿川氏宛の葉書等9通は、昭和17年阿川氏出征前の東京に宛てた書簡に始まり、同年阿川氏が訓練のため出征した台湾高雄宛、以後帰国して在学した横須賀海軍通信学校宛、そして、霞が関にあった海軍省宛の葉書で、最後の葉書が、昭和19年3月の日付になっている。それから5か月

後の同年 8 月、阿川氏は海軍中尉に昇進し「支那方面艦隊司令部附」の辞令が出て中国に渡ることになる。阿川氏は博多を発つ前に、広島に立ち寄り光風先生に最後の別れを告げている。それからちょうど 1 年後に敗戦。光風先生は原爆により被爆死し、皮肉にも中国に出征した阿川氏と海軍特攻に配属された大浜氏は生きて還ることになる。

その最後の葉書が、大浜氏が短歌を書き連ね、「光風さんの歌を写した」という同じ歌を含めた、11 首からなる光風先生の、いわゆる「短歌通信」である。多分大浜氏に送ったと同じ葉書を阿川氏にも送ったものだろう。この 11 首の歌の内 9 首が、大浜氏からの「短歌通信」に写されている。光風先生の歌も 3 首紹介する。

「もののふの阿川弘之よこしたる酔ひしれ歌は見るにたのしも」  
「うら若き〇〇〇〇の酔ひ姿たまらぬと涙をとめもあらむ」  
「煙草わが止めしといまだに思へるは巖比古一人さまあみやがれ」

光風先生も、大浜氏も、言うまでもないが万葉学者であると同時に、アララギ派の歌人だった。そして、大浜氏の唯一の弟子である高岡万葉歴史館の坂本館長も、短歌会「龍」を主宰する歌人である。冒頭で坂本館長は短歌会の面々とともに秋田仙北市のカタクリ群生地に出かけたことを書いた。とすると、それは吟行の旅だったのだろう。そこで、現地で詠んだ歌を披露してほしいと催促したところ、「ろくな歌ができませんでした」というコメントとともに、素敵な歌 8 首を寄せてくれた。言わば、坂本館長の「短歌通信」である。

「戦時下の友に我が師の送りたる  
絵はがきの花堅香子咲けり」  
「風狂の身にはあらねどコロナ禍の  
春を惜しみて桜見に行く」

もう 1 首は、坂本館長の師大浜巖比古氏に倣い、万葉仮名で表記してもらおうようお願いした。その歌は、家持の秀歌を想わせる、現代の「八十娘子ら」の歌である。

ハルカゼニヤマイチメンノカタカゴノハナソ  
「春風尔山一面乃堅香子之花叙  
ササメクヤソヲトメラガ  
佐々米久八十娘子等之」



仙北市のカタクリ群生の郷（坂本館長撮影）

これら 3 通の「短歌通信」は、万葉集、つまり大伴家持らを起点とする、3 代にわたる万葉学者の師弟による、リレー「短歌通信」だった。その原点となった、家持の「堅香子の歌」も「白文」で併記しておこう。

モノフノヤソヲトメラガクミマフテライノウヘノカタカゴノハナソ  
「物部乃八十娘子等之■乱寺井之於乃堅香子之花」（■は、手偏に邑）大伴家持（巻 19・4143）